

## I | 映画館での上映

2

## 公開本数・公開作品

## 公開本数

映画の公開本数は、1955年以降2004年までは大体550~650本を推移してきたが、デジタル化の進行とともに増加し続け、2013年には日本映画、外国映画とも500本以上が公開され、公開本数は1000本を越えた。2019年には1278本もの映画が公開され、コロナ禍の2020年も日本映画506本、外国映画511本の1017本が公開された。2021年は1000本をわずかに割り込んだが、2022年は再び増加に転じ、1143本が公開されている(映連発表数値)。日本映画の公開本数は634本、外国映画は509本となり、コロナ以前の水準に戻りつつある。

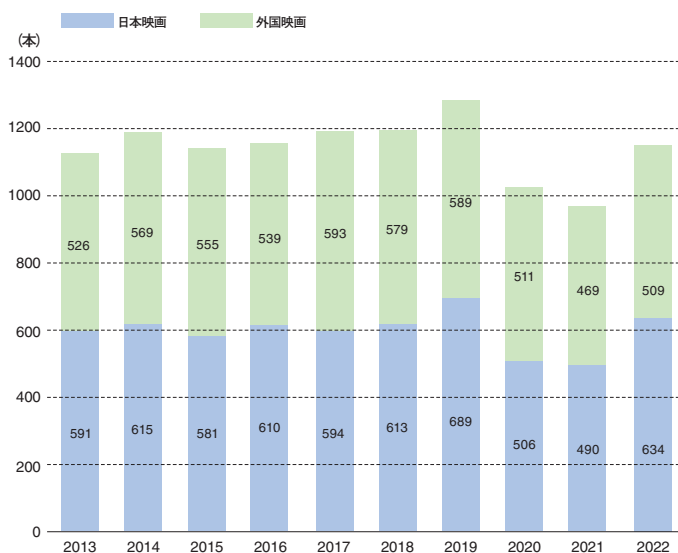
→ [fig.07](#)

## 興行収入

2022年の興行収入は、日本映画が1465億7900万円(前年比114.2%)、外国映画が665億3200万円(前年比198.3%)、合計2131億1100万円で、前年を31.6%、上回っている。特に日本映画は、コロナ禍前の非常に好調だった2019年の1421億9200万円を上回る興行収入を上げている。外国映画も日本映画ほどではないものの、2021年の2倍近い興行収入となっている。

2022年で特筆すべき点は、興行収入が100億円を越える(近い)映画が5作品にもなったことである。日本映画では『ONE PIECE FILM RED』(197.0)、『劇場版呪術廻戦0』(138.0)、『すずめの戸締り』(131.5)、『名探偵

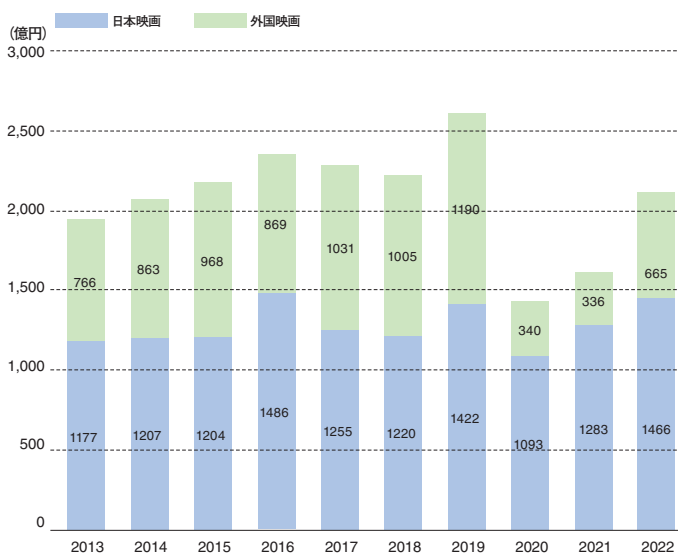
fig.07 公開本数の推移(2013-2022)



	公開本数			シェア	
	日本映画	外国映画	合計	日本映画	外国映画
2013	591	526	1,117	52.9%	47.1%
2014	615	569	1,184	51.9%	48.1%
2015	581	555	1,136	51.1%	48.9%
2016	610	539	1,149	53.1%	46.9%
2017	594	593	1,187	50.0%	50.0%
2018	613	579	1,192	51.4%	48.6%
2019	689	589	1,278	53.9%	46.1%
2020	506	511	1,017	49.8%	50.2%
2021	490	469	959	51.1%	48.9%
2022	634	509	1,143	55.5%	44.5%

—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

fig.08 興行収入の推移(2013-2022)



	興行収入(億円)			シェア	
	日本映画	外国映画	合計	日本映画	外国映画
2013	1,176.85	765.52	1,942.37	60.6%	39.4%
2014	1,207.15	863.19	2,070.34	58.3%	41.7%
2015	1,203.67	967.52	2,171.19	55.4%	44.6%
2016	1,486.08	869.00	2,355.08	63.1%	36.9%
2017	1,254.83	1,030.89	2,285.72	54.9%	45.1%
2018	1,220.29	1,004.82	2,225.11	54.8%	45.2%
2019	1,421.92	1,189.88	2,611.80	54.4%	45.6%
2020	1,092.76	340.09	1,432.85	76.3%	23.7%
2021	1,283.39	335.54	1,618.93	79.3%	20.7%
2022	1,465.79	665.32	2,131.11	68.8%	31.2%

—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

コナン ハロウインの花嫁』(97.8)の4本(12月公開の『THE FIRST SLAM DUNK』を加えると5本)、外国映画では『トップガン・マーヴェリック』が135.7億円の大ヒットを記録している。興行収入が10億円を越える41作品だけで、興行収入の72%、100億円以上の5作品で32.8%を占めるという寡占状態となっている。

日本映画と外国映画の割合は、日本映画68.8%に対して外国映画31.2%で、外国映画のシェアがようやく30%台まで回復したが、2019年の45.6%に比較すると依然非常に低い水準にとどまっている。

→ fig.08, fig.09

### 公開規模

コミュニティシネマセンターではインターネットに掲載された情報等を元に独自に「公開作品」リストを作成している。2022年の公開本数は日本映画538本、外国映画635本、合計1173本(都内1~2館特集上映での公開作品を含めると1348本)という数値を得ている。映連発表の数値は、日本映画634本、外国映画509本、計1143本となっており、多少の齟齬があるが、以下では、こちらで得たデータを元に公開作品の中味を見てみる。

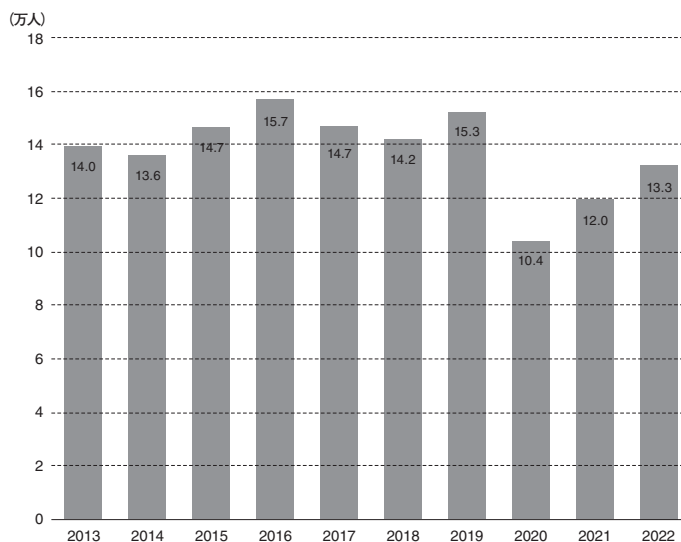
### 公開規模

「300館以上」の映画館で公開されたのは、日

本映画63本、外国映画29本で、いずれも2021年を上回っている。

日本映画では、興行収入が100億円を越えた『すずめの戸締まり』(11月)、『劇場版 呪術廻戦 0』(2021年12月)、『THE FIRST SLAM DUNK』(2022年12月)、『ONE PIECE FILM RED』(8月)、『名探偵コナン ハロウインの花嫁』(4月)、それに『映画ドラえもん のび太の宇宙小戦争(リトルスターウォーズ)』(3月)のアニメーション6作品と『キングダム2 遙かなる大地へ』(7月)が370館以上の大規模公開となっている。アニメーションでは『ドラゴンボール超(スーパー)スーパーヒーロー』(6月)や、『映画クレヨンしんちゃん もののけニンジャ珍風伝』(4月)も360館以上で公開され20億円を越えるヒットとなっている。

fig.09 1作品当たりの観客数の推移(2013-2022)



	公開本数(本)	観客者数(千人)	1作品当たりの観客数	前年比
2013	1,117	155,888	139,560	-18,283
2014	1,184	161,116	136,078	-3,482
2015	1,136	166,630	146,681	10,604
2016	1,149	180,189	156,822	10,141
2017	1,187	174,483	146,995	-9,828
2018	1,192	169,210	141,955	-5,040
2019	1,278	194,910	152,512	10,557
2020	1,017	106,137	104,363	-48,149
2021	959	114,818	119,727	15,364
2022	1,143	152,005	132,988	13,261

—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

『シン・ウルトラマン』(5月)、『99.9 刑事専門弁護士 THE MOVIE』(2021年12月)、『コンフィデンスマンJP 英雄編』(1月)、『あなたの番です 劇場版』(2021年12月)、『沈黙のパレード』(9月)といった話題作、シリーズ作品が350館以上で公開され、多くの観客を集めた。カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した『ベイベー・ブローカー』や、日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した『ある男』(11月)、東京国際映画祭オープニングを飾った『ラーゲリより愛を込めて』(12月)なども300館以上で公開されている。

外国映画では、5月に公開された『トップガン マーヴェリック』の大ヒット(135.7億円)が目立っている。映画館離れが懸念される中高年層を含む幅広い層から集客している。また、2020年には公開が控えられたハリウッドの大作や話題作、『ジュラシック・ワールド 新たなる支配者』(7月)、『アバター ウェイ・オブ・ウォーター』(12月)、『ドクター・ストレンジ マルチバース・オブ・マッドネス』(5月)、『マトリックス レザレクションズ』(2021年12月)、『ブラックパンサー ワカンダ・フォーエバー』(1月)、『スパイダーマン ノー・ウェイ・ホーム』(1月)等々が次々に公開され、ファミリー向けの『ミニオンズ フィーバー』(7月)、『SING シング ネクストステージ』(3月)、『ファンタスティック・ビーストとダンブルドアの秘密』(4月)、『ボス・ベイベー ファミリー・ミッション』(2021年12月)も公開されて、映画館に賑わいを取り戻すこととなった。

コロナ禍の2020年以降、シネコンはそれまで上映しなかった多様な作品にも手を伸ばすようになった。その傾向は2022年も続いている。また、2020年までは、日本映画、外国映画とも150館以上で公開される作品のほとんどは「シネコンのみ」で上映されていたが、2021年以降は大規模公開作品がシネコン以外の映画館、ミニシアターでも上映されることが増えている。

コロナ禍の2020-2021年の傾向として、シネマコンプレックスとミニシアターの両方で公開される作品が増えたということがある。シネコンとミニシアターの両方で公開される作品は、2019年は日本映画で104本(18%)、外国映画では

125本(24%)だったが、2021年は日本映画で160本(32%)、外国映画は204本(41%)と大幅に増加、2022年は日本映画169本(31%)、外国映画233本(37%)となっている。シネコンの上映作品の多様化が進んだ一方で、ミニシアターではシネコンでの公開から多少遅れても集客が見込める話題作を上映するようになり、上映作品の明確な線引きがなくなりつつある。そのような状況でも、ミニシアターでしか上映されない作品のパーセンテージはあまり変化していない。「49館以下」の小規模公開作品は日本映画で314本、外国映画では472本に上る。これらの作品のうち、日本映画で194本(62%)、外国映画で311本(66%)がミニシアターのみでの公開となっている。

ミニシアターでしか上映されない作品の中には、国際映画祭等で高い評価を得た作品や、世界的巨匠の作品、重要なドキュメンタリー映画、多くの若い作り手たちの野心的な作品が含まれている。また、後述する旧作のデジタルリマスター版のリバイバル上映や監督の特集上映なども、そのほとんどが、ミニシアターのみで行われている。

→ [fig.10](#)

## 公開作品の種類

2022年の日本映画の公開本数(538本)は、コロナ前の2019年(577本)とほぼ同水準まで回復している。その内訳をみると、劇映画の新作が358本、アニメーション新作が85本、ドキュメンタリー映画が77本、公演やライブ等のODSが18本で、この合計が538本、特集上映(短編・若手作品等、公開館数1~2館)が101本となっている。

アニメーションは85本が公開されている。前述のように『すずめの戸締まり』、『劇場版呪術廻戦 0』、『THE FIRST SLAM DUNK』(2022年12月公開)、『ONE PIECE FILM RED』、『名探偵コナン ハロウィンの花嫁』という5本のアニメーション作品が興行収入100億円を越え、圧倒的な集客力を見せつけている。このような大規模公開作品以外に、ヴェネチア、アヌシー、ロッテルダムといった国際映画祭で上映

された『犬王』(5月)や、2010年に放送されたテレビアニメ「四畳半神話大系」の映画版である『四畳半タイムマシンブルース』といった中規模のアニメーションも話題を集めた。

劇映画では、前述の大規模公開作品に加え、『さかなのこ』(9月)、『死刑にいたる病』(5月)、『土を喰らう十二月』(11月)、『窓辺にて』(11月)、『あちらにいる鬼』(11月)や、海外映画祭で上映された『PLAN75』(6月)『ケイコ目を澄ませて』(12月)、『こちらあみこ』(7月)などが、ミニシアター、シネコンの両方で上映され、多くの観客を集めた。

538本の公開作品の中、60%以上を占める314本が49館以下の小規模公開作品であり、そのほとんどがミニシアターのみで上映されている。その中には、重要な監督の最新作や、国際映画祭で高い評価を受けた『やまぶき』、『春原さんのうた』といった作品、国内の映画祭で受賞した若手監督の作品などが含まれている。

2022年も多くのドキュメンタリー映画が劇場公開された。公開された77作品のうち、全国30館以上での公開となった作品は28本(2019年は12本)に上る。シネマコンプレックスで上映される作品も増えており、映画館でのドキュメンタリー映画の上映が定着していることをうかがわせる。

**外国映画**は、2022年は635本が公開され、公開本数は2019年(514本)を上回っている。内訳は、劇映画の新作が307本、アニメーションの新作が18本、ドキュメンタリー映画62本、ODS37本、旧作デジタルリマスター版のリバイバル公開が51本、旧作の特集上映が22企画となっている。さらに、東京の1館(あるいは2、3館)のみで特集上映された作品74本を加えると合計709本となる。

2022年で注目されるのは、旧作の特集上映の盛り上がりである。2021年も15企画79本が上映されたが、2022年はそれをはるかに上回る22企画で132本もの映画が上映された。

主な特集を挙げてみる。

2022年の主な特集上映

WKW4K ウォン・カーワイ4K  
 ジェラルド・フィリップ生誕100年映画祭  
 ジャック・リヴェット映画祭  
 シャンタル・アケルマン映画祭  
 ジョン・カーペンター レトロスペクティブ 2022  
 テアトル・クラシックス  
 名優ポール・ニューマン特集 碧い瞳の逆児  
 愛しのミュージカル映画たち

ピエール・エテックス レトロスペクティブ  
 フォーエバー・チャップリン ~チャールズ・チャップリン映画祭~  
 ルイス・ブニュエル監督特集  
 生誕90周年上映 フランソワ・トリュフォーの冒険  
 没後40年 ロミー・シュナイダー映画祭  
 没後60年 ジャン・コクトー映画祭  
 NOBODY KNOWS チャーリー・パワーズ 発明中毒篇  
 クロード・ミレー映画祭

fig.10 2022年に映画館で公開された作品の公開規模

日本映画																	
公開館数	2022					2021					2020						
	シネコンのみ		シネコン+ミニシアターのみ		ミニシアターのみ	シネコンのみ		シネコン+ミニシアターのみ		ミニシアターのみ	シネコンのみ		シネコン+ミニシアターのみ		ミニシアターのみ		
300館以上	63	12%	57	6	0	48	10%	43	5	0	34	8%	34	0	0		
150~299館	45	8%	28	17	0	46	9%	18	28	0	34	8%	26	8	0		
100~149館	35	7%	13	22	0	39	8%	20	19	0	35	8%	20	15	0		
70~99館	39	7%	18	21	0	46	9%	13	33	0	32	7%	17	15	0		
50~69館	42	8%	12	26	4	32	6%	13	18	1	37	8%	16	17	4		
30~49館	73	14%	18	38	17	61	12%	15	32	14	49	11%	12	21	16		
10~29館	118	22%	18	24	76	90	18%	7	19	64	89	20%	18	13	58		
9館以下	123	23%	7	15	202	142	28%	7	6	129	130	30%	12	6	112		
公開本数合計①	<b>538</b> 100%					<b>504</b> 100%					<b>440</b> 100%						
			32%	31%	56%	119%			27%	32%	41%	100%			35%	22%	43%
49館以下で公開された作品本数	314					293					268						
うちミニシアターのみでの上映作品	295 94%					207 71%					186 69%						
その他(特集での1回上映など)	101					40					42						
日本映画公開本数合計	<b>639</b>					<b>544</b>					<b>482</b>						
外国映画																	
公開館数	2022					2021					2020						
	シネコンのみ		シネコン+ミニシアターのみ		ミニシアターのみ	シネコンのみ		シネコン+ミニシアターのみ		ミニシアターのみ	シネコンのみ		シネコン+ミニシアターのみ		ミニシアターのみ		
300館以上	29	5%	27	2	0	21	4%	21	0	0	14	3%	14	0	0		
150~299館	23	4%	13	10	0	31	6%	12	19	0	13	3%	11	2	0		
70~149館	50	8%	5	45	0	42	9%	6	35	1	48	12%	9	35	4		
50~69館	61	10%	1	53	7	50	10%	3	42	5	74	18%	7	56	11		
30~49館	135	21%	6	74	55	140	28%	7	69	64	91	22%	6	37	48		
10~29館	247	39%	26	38	183	154	31%	3	31	120	123	30%	20	28	75		
9館以下	90	14%	6	11	73	56	11%	5	8	43	52	13%	11	2	39		
公開本数合計①	<b>635</b> 100%					<b>494</b> 100%					<b>415</b> 100%						
			13%	37%	50%	100%			12%	41%	47%			19%	39%	43%	
49館以下で公開された作品本数	472					350					266						
うちミニシアターのみでの上映作品	311 66%					227 65%					162 61%						
その他(都内1~2館での上映など)	74					74					125						
外国映画公開本数合計②	<b>709</b>					<b>568</b>					<b>540</b>						
日本映画①+	1173					998					855						
外国映画①	1348					1112					1022						

特に注目を集めたのは「WKW4K ウォン・カーウエイ4K」で、『恋する惑星』『天使の涙』『ブエノスアイレス』『花様年華』『2046』というウォン・カーウエイ監督の代表作5本を4Kデジタルリマスター版で上映するもので、90館以上で上映されて多くの観客を集めた。また、これまで上映の機会が限られていたアケルマン監督作品を集めた「シヤンタル・アケルマン映画祭」や、久しぶりの上映となった「ジャック・リヴェット映画祭」も、多くのミニシアターで上映され、これらの作品に初めて出会う若い観客を集めている。「NOBODY KNOWS チャーリー・バワーズ 発明中毒篇」は、神戸映画資料館が文化庁の支援事業を活用して実施した企画で、約20館のミニシアターで上映された。

「生誕90周年上映 フランソワ・トリュフォーの冒険」「没後40年 ロミー・シュナイダー映画祭」は幅広い世代の映画ファンを魅了した。東京テアトルが「テアトル・クラシックス」というプログラムをスタート、「愛しのミュージカル映画たち」「名優ポール・ニューマン特集」を開催、これに続く企画が期待される。シネコンを中心に名作・話題作を集めて上映する「午前十時の映画祭」も2021年に復活している。

このように旧作の特集上映が盛んに行われる現象は、日本特有のものではなく、ヨーロッパでも同様であり、コロナ後の映画館で若い観客を拡大する一助ともなっているようである。

旧作のリマスター版のリバイバル公開も好調で、『フォレスト・ガンプ 一期一会』(1995)、『ショーシャンクの空に』(1995)、『サタデー・ナイト・フィーバー』(1978)、『フラッシュダンス』(1983)、『ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還』(04)、『ロード・オブ・ザ・リング 二つの塔』(03)といった大ヒット作や、『オールド・ボーイ』(04)、『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(00)、『親愛なる日記』(95)、『子猫をお願い』(04)等のミニシアター系のヒット作まで、多彩な作品が公開され、映画ファンを集めている。

このほか、ミニシアターを中心に、インド映画『RRR』がヒットしたこと、カンヌ国際映画祭のオープニングを飾ったレオス・カラックス監督の10年ぶりの新作『アネット』が公開されたことなども印象深い。

→ fig.11

fig.11  
2022年に公開された  
映画の種類

日本映画	2022	2021	2020	2019
一般映画新作(劇映画)	358	321	304	380
一般映画新作(アニメーション)	85	95	63	94
ドキュメンタリー	77	68	60	71
ODS	18	20	13	32
日本映画合計①	538	504	440	577
上記の他、公開館数1館(短篇・若手・その他)	101	40	42	73
日本映画合計②	639	544	482	650
外国映画	2021	2021	2020	2019
一般映画新作(劇映画)	307	279	272	330
一般映画新作(アニメーション)	18	20	16	16
ドキュメンタリー	62	69	33	55
ODS	37	16	31	47
旧作デジタルリマスター版	51	31	14	35
特集上映(旧作デジタルリバイバル)22企画	132	79	49	31
特集(近作)5企画	28			
外国映画合計①	635	494	415	514
上記の他、1館(あるいは2、3館)のみでの上映	74	74	125	128
外国映画合計②	709	568	540	642
日本映画①+外国映画①	1173	998	855	1091



## 興行収入10億円を超える映画/ 10億円以下の映画

2022年、興行収入が10億円を越える映画は日本映画・外国映画合わせて41本(2021年37本、2019年65本)となった。本数では全公開本数1143本の3.6%、興行収入では、日本映画約1038.5億円、洋画493.2億円で合計1531.7億円となり、全興行収入の72% (2021年は62.2%)を占めている。

→ fig.12, 13, 14, 15, 16

fig.12

2022年興行収入10億円以上作品[日本映画]

順位	公開月	作品名	興行収入 (億円)	配給会社
1	8月	ONE PIECE FILM RED	197	東映
2	21 12月	劇場版 呪術廻戦 0	138	東宝
3	11月	すずめの戸締まり	131.5	東宝
4	4月	名探偵コナン ハロウィンの花嫁	97.8	東宝
5	7月	キングダム2 遥かなる大地へ	51.6	東宝 SPE
6	5月	シン・ウルトラマン	44.4	東宝
7	21 12月	99.9 刑事専門弁護士 THE MOVIE	30.1	松竹
8	3月	余命10年	30	WB
8	9月	沈黙のバレード	30	東宝
10	1月	コンフィデンスマンJP 英雄編	28.9	東宝
11	3月	映画ドラえもん のび太の宇宙小戦争 2021	26.9	東宝
12	6月	ドラゴンボール超 スーパーヒーロー	25.1	東映
13	5月	映画 五等分の花嫁	22.4	ポニーキャニオン
14	4月	映画クレヨンしんちゃん もののけニンジャ珍風伝	20.4	東宝
15	21 12月	あなたの番です 劇場版	20	東宝
16	9月	劇場版 うたの☆プリンスさまっ♪マジLOVEスタースリッシュツアーズ	19.8	松竹
17	3月	映画 おそ松さん	16.7	東宝
18	7月	今夜、世界からこの恋が消えても	15.3	東宝
19	11月	劇場版 転生したらスライムだった件 紅蓮の絆編	15	バンダイナムコ フィルムワークス
20	10月	カラダ探し	11.8	WB
21	10月	劇場版 ソードアート・オンライン -プログレッシブ- ―冥き夕闇のスケルツォ―	11.6	アニプレックス
22	9月	HiGH&LOW THE WORST X	11.4	松竹
23	5月	死刑にいたる病	11	クロックワークス
23	6月	機動戦士ガンダム ククルス・ドアン の島	11	松竹 ODS 事業室
25	7月	映画 ゆるキャン△	10.8	松竹
26	4月	劇場版 Free! the Final Stroke 後編	10	松竹
合計			1038.5	

—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

※「ARASHI Anniversary Tour 5×20 FILM “Record of Memories”」(2021年11月公開/松竹配給)50.6億円

※「ドライブ・マイ・カー」(2021年8月公開/ビターズ・エンド配給)13.7億円

fig.13

2022年興行収入10億円以上作品[外国映画]

順位	公開月	作品名	興行収入 (億円)	配給会社
1	5月	トップガン マーヴェリック	135.7	東和ピクチャーズ
2	7月	ジュラシック・ワールド/新たなる支配者	63.2	東宝東和
3	4月	ファンタスティック・ビーストとダンブルドアの秘密	46	WB
4	7月	ミニオンズ フィーバー	44.4	東宝東和
5	1月	スパイダーマン:ノー・ウェイ・ホーム	42.5	SPE
6	3月	SING/シング: ネクストステージ	33.1	東宝東和
7	5月	ドクター・ストレンジ/マルチバース・オブ・マッドネス	21.6	WDS
8	21 12月	ヴェノム:レット・ゼア・ビー・カーネイジ	19.1	SPE
9	21 12月	マトリックス レザレクションズ	14	WB
10	7月	ソー:ラブ&サンダー	13.5	WDS
11	9月	ブレット・トレイン	13.5	SPE
12	11月	ブラックパンサー ワカンダ・フォーエバー	12.5	WDS
13	7月	バズ・ライトイヤー	12.2	WDS
14	3月	THE BATMAN-ザ・バットマン-	11.9	WB
15	21 12月	ボス・ベイビー ファミリー・ミッション	10	東宝東和 GAGA
合計			493.2	

—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

fig.14

## 2022年興行収入上位20作品

順位	公開月	作品名	興行収入 (億円)	配給会社
1	8月	ONE PIECE FILM RED	197	東映
2	21 12月	劇場版 呪術廻戦 0	138	東宝
3	5月	トップガン マーヴェリック	135.7	東和ピクチャーズ
4	11月	すずめの戸締まり	131.5	東宝
5	4月	名探偵コナン ハロウィンの花嫁	97.8	東宝
6	7月	ジュラシック・ワールド/新たなる支配者	63.2	東宝東和
7	7月	キングダム2 遥かなる大地へ	51.6	東宝 SPE
8	4月	ファンタスティック・ビーストとダンブルドアの秘密	46	WB
9	5月	シン・ウルトラマン	44.4	東宝
10	7月	ミニオンズ フィーバー	44.4	東宝東和
11	1月	スパイダーマン:ノー・ウェイ・ホーム	42.5	SPE
12	3月	SING/シング: ネクストステージ	33.1	東宝東和
13	21 12月	99.9 刑事専門弁護士 THE MOVIE	30.1	松竹
14	3月	余命10年	30	WB
15	9月	沈黙のパレード	30	東宝
16	1月	コンフィデンスマンJP 英雄編	28.9	東宝
17	3月	映画ドラえもん のび太の宇宙小戦争 2021	26.9	東宝
18	6月	ドラゴンボール超 スーパーヒーロー	25.1	東映
19	5月	映画 五分の花嫁	22.4	ポニーキャニオン
20	5月	ドクター・ストレンジ/マルチバース・オブ・マッドネス	21.6	WDS
合計			1240.2	
2022年興行収入			2131.1	
2022年興行収入10億円以上作品			1531.7	
興行収入10億円以上作品の割合			71.9%	

fig.15

## 興行収入10億円以上の作品/興行収入10億円未満(2022)

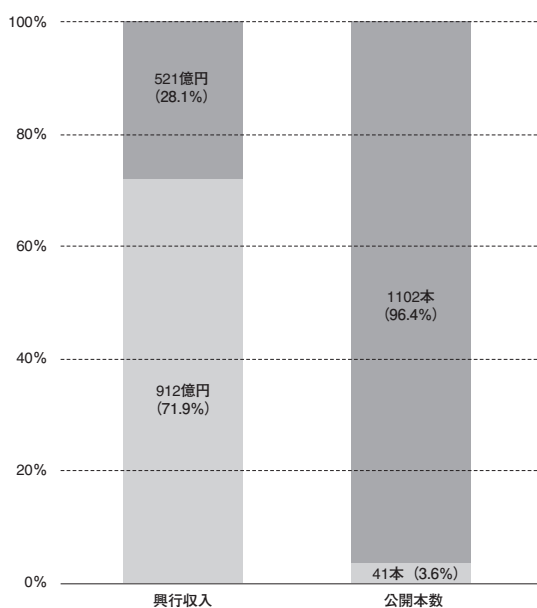


fig.16

## 興行収入10億円以上の映画/興行収入10億円未満の映画(2013-2022)

	10億円以上		10億円未満	
	全体	興収 割合	興収 割合	
2013	1,942	1,379 71.0%	563	29.0%
2014	2,070	1,411 68.2%	659	31.8%
2015	2,171	1,595 73.5%	576	26.5%
2016	2,355	1,763 74.9%	592	25.1%
2017	2,286	1,618 70.8%	667	29.2%
2018	2,225	1,563 70.2%	662	29.8%
2019	2,611	2,009 76.9%	602	23.1%
2020	1,433	912 63.7%	521	36.3%
2021	1,619	1,006 62.2%	613	37.8%
2022	2,131	1,532 71.9%	599	28.1%

	10億円以上		10億円未満	
	全体 本数	割合	本数	割合
2013	1,117	56 5.0%	1,061	95.0%
2014	1,184	49 4.1%	1,135	95.9%
2015	1,136	61 5.4%	1,075	94.6%
2016	1,149	61 5.3%	1,088	94.7%
2017	1,187	62 5.2%	1,125	94.8%
2018	1,192	54 4.5%	1,138	95.5%
2019	1,278	65 5.1%	1,213	94.9%
2020	1,017	25 2.5%	992	97.5%
2021	959	37 3.9%	922	96.1%
2022	1,143	41 3.6%	1,102	96.4%

—fig. 15, 16ともに「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

